

学校図書館 Take Off!

No.15



本号の目次

トピックス	子どもゆめ基金助成事業報告	P. 2-3
	アーサー・ビナードさん講演会 『ぜったい学校にはいかないからね』	
連載	会員のおすすめの本 学校図書館と公共図書館の現場から	P. 4-5
トピックス	子どもゆめ基金助成事業2	
	学校図書館井戸端会議Part3「学ぶことは変わることに」	P. 6
活動報告	要望書を教育長に提出	P. 7
情報		P. 8

今年六月に、国の学校図書館法の一部改正があり、学校司書が法的に位置づけられました。この大きな流れの中、私たち八王子の学校図書館も、多くの人たちの地道な努力が実り、少しずつではありませんが、整備されてきました。「育てる会」も活動十二年目に入り、私たちの一貫した願いの中、市では「学校図書館サポート事業」が立ち上がり、また学校へ司書資格のある嘱託職員（読書推進担当学校図書館サポーター）が週一回とはいえ、希望する学校に派遣されるようになりました。その成果も上がってきています。

先日、市教委指導課主催の司書教諭研修会があり、講師の先生のアシスタントとして参加する機会がありました。司書教諭の先生方がたくさん参加され、ブックトークの講義とその具体的な実践方法を熱心に研修されていました。先生方への支援が学校現場に還元されてゆく。そしてそれを支えるボランティアの方々。それぞれの立場の中での地道な努力こそ一番の力であり、指導課がその中心として機能することの大切さを確信しています。

(本会代表 宮本茂)

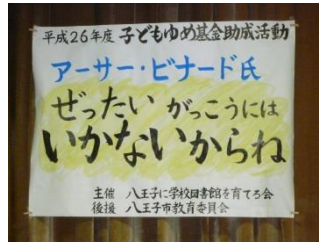
八王子に学校図書館を育てる会 広報紙
二〇一四年十月二十五日発行 第十五号

トピックス 子どもゆめ基金助成事業報告

アーサー・ビナードさん講演会記録

9月6日 八王子市立中央図書館

「ぜったい 学校には いかないからね」



学校図書館のおはなしのなにと、前置きされて、一冊の絵本の読み聞かせから講演が始まった。その絵本はローレン・チャイルド／作・絵の「ぜったい がっこうには いかないからね」。奥さまの木坂涼さん翻訳の絵本だ。

学校に行かないという妹ローラを兄が一生懸命説得して、学校に行こうよと誘うこの絵本に、学校とは何かを考えるのに発見があったと、アーサーさんは言います。子どもは本当に忙しくて、やりたいことがたくさんあって、確かに学校に行く暇はない。空気と水があれば、どんな空間も創りあげられる。数を数えるのも10で十分。金儲けをしようと思わなければね。でもローラの弱みはお友達がいらないこと。ローラにしか見えない友だちはいるけれども。アー

サーさんも小2のとき得るものがないと母と議論して、1週間登校拒否をしたが、やはり一人ぼっちがこわかった。一人ぼっちとどう向き合うかが、学校とつきあうキーポイント。学校は社会のシステムに組み込まれていて、進路が約束されている。そこから踏み外していくことの怖さがあるから、みんなが学校に行っていて、自分だけ自由な場所にいるのは、実は不安。(ここまで書いてくると、実にシビアに聞こえるが、実際は絵本を読み聞かせながらのとても楽しいお話であった)で、ローラはどうしたか。それは絵本をどうぞ。

次にエリック・カールの「ホットケーキのできあがり」(アーサーさん訳)の読み聞かせで、ホットケーキを食べられるまでの手づくりの作業、自分の手(身体の一部)を使つての暮らしとつながる技術の話と、暮らしと直接つながらない、人体を超える技術(たとえば宇宙開発など知識がたくさん必要なこと)を較べるお話に入った。広島で無農薬の農業をして、段々畑を大事にすることで、瀬戸内海を豊かにしている友人の話と、宇宙開発の話は、今の世の中のムダにたちあうのは、ある意味役に立つという説得力のある話だった。

その宇宙開発のような文化を作りあげるには、文字が必要。亀甲文字（表意文字）やエジプトの絵文字は記録を後世に伝え、統一されたものを伝達し、他を支配する。しかし先住民は文字がなくても語る言葉で文明を作り、語りつないできた。語りの文明は誰が作ったかは残らないが、神さまの領域として残った。と言いながら、自分も文字を使う詩人という仕事をしているとアーサーさんは笑う。

なぜ文字はできたか、それは死者と意思の疎通をはかるためではなかったかとアーサーさんは言う。つながりたい、会いたい人に文字で会える。死者と語り合える。アーサーさんも宮澤賢治と文字を通してどれほど話し合ったかわからないとか。そして絵本「雨ニモマケズ」の翻訳へとつながった。文字は記録され、作った人が残る。文字を覚えると過去の人たちと交流できる。学校で文字と数字を覚えて一番の恩恵は死者の遺したものに触れることができること。翻訳を通して、他の文化の人たちとも繋かれる。まるでどこでもドアのように。

このバランスのとれた場所が公立図書館や学校図書館。本屋さんの平積みの本のように出版業界の目先だけのものではなく、時間軸を超えた選書に出会

える。みんなの共有財産である。そして学校図書館は今の自分が居るところではない場所に自由に心を飛ばすことが出来る場所。居場所のない子どもたちにとつて、自分で考える道が見えてくる多様性をはらむ場所。でも、学校図書館は駆け込み寺だけではなく、豊かな交流の場となつて、人類の長い歴史の英知の中に入ることが出来る。

アメリカは資本主義の消費社会。高校の図書館で、アーサーさんは「資本論」に出会った。資本主義を分析し、自分のみこまれていく社会について知っていくきっかけとなった。ここでドン・フリーマンの「ダンデライオン」の読み聞かせ。アーサーさんの子ども時代の愛読書だが、日本では未訳で、アーサーさんが翻訳した。広告にひっかかっていつの間にか自分でなくなつてしまったライオンがあまりのままでの自分に気づく。学校図書館は、広告に惑わされ

ない、自分の頭で考えられる子どもたちを育てる場である。私たちは社会の矛盾に組み込まれながら、大きな矛盾を抱えながら生きていくが、それを守っていくのが図書館である。（田沼恵美子）



『ういづいさいばん ライオンのしごと』

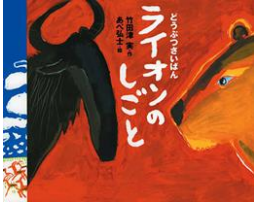
作：竹田津実 絵：あべ弘士／ 偕成社

よく「高学年の読み聞かせの選書で悩んでいます」と伺うときにおすすめていている本があります。

タンザニアの草原に立つイチジクの木のもとで、繰り広げられるどうぶつさいばん。訴えたのはヌー。訴えられたのはライオン。ヌーの弁護士はゾウ、ライオンの弁護士はオオミミギツネ。証人のどうぶつたちの話はとても興味深く、聞いている子供達も集中しているのが読み手にも伝わってきます。タイトルの「ライオンのしごと」というのをこの絵本で知ることができました。

文部科学省が道徳教育と「HERO」（平成26年7～9月放送のテレビドラマ）とタイアップさせたことは、学校に貼られたポスターをみてご存じの方も多いと思います。ドラマの最終回にもあった裁判ですが、難しい用語も絵本を通してわかる何かがあればと願いつつ、こうした双方の背景も考えられるきっかけになつてもらえたらと思います。

（学校図書館司書 S）



『学校では教えてくれない！国語辞典の遊び方』

サンキュータツオ／角川学芸出版

先日「六年生に与える辞書として中学校でも使えるもの」という相談がありました。大変恥ずかしい話ですが、最近はおつばら検索サイトの「辞書」を利用しており、先輩司書に相談したところこの本を紹介していただきました。

いざ購入するとき、なかなか「辞書の読み比べ」まではしないのではないのでしょうか。そこでこの本。辞書200冊をコレクションする早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻博士後期課程修了、文学修士の学者芸人サンキュータツオ氏が各国語辞典の違いについて大変わかりやすく教えてくれます。今までもあまり気にしなかった冒頭部分の編集方針一つをとつても、各社の個性やこだわりがみえること、同じことばを辞書によってどう語釈しているか、版がかわったときの変遷、辞書のルーツや進化の過程等を解説してくれます。キャラクターで解説された辞書ガイドが掲載されているので、きつと「自分にあう辞書」が見つかるのでは、と思います。

（学校図書館司書 S）



本にかかわる現場から 学校図書館編

『もっとおおきなたいほうを』

一見正直 作／福音館書店

「かわで かってに さかなをとっている キツネがいます」という注進を受けて、王様は伝家の大砲を持って出動します。「なぜなら このかわで とれる ピンクの さかなは おうさまの だいこうぶつ」で、「キツネのくせに なまいきだ」と思ったし、なにより大砲を「うちたくて うちたくて しかたがなかった」からです。

王様が「大砲を持ちだすとキツネもそれに対抗。王様がさらに大きな大砲を用意すればキツネも負けていけません。いつのまにやら発端の事件はそっちのけ。王様が「だいじなのは おおきいことだけではない！」などと言い出してさらにヒートアップ。王様とキツネのエスカレーターしていくやりとりが、とぼけた絵柄と相まって愉快ではあるのですが…

「大砲」のようなものを持つと人は使ってみたくて誘惑に駆られるもの。理由など二の次です。さてこの本、どなたに読んでいただきましょうか？

(公共図書館勤務 M)



本にかかわる現場から

公共図書館編

『夏の朝』

本田昌子 作・木村彩子 画
／福音館書店

祖父の一周忌、莉子は小夜子と名乗る老婦人から庭に蓮を植えたのは祖父と教えられ、蓮のつぼみの中には人の『想い』が詰まっているという言葉に心惹かれる。

翌朝、一つのつぼみがゆっくり開くや、さわやかな甘い香りの中、莉子は真夏の昼日中にいた。祖父は莉子に、台所の床下に莉子からの預かり物を入れておいたという。…いつしか莉子は蓮池に戻っていた。次の日もその次の日も、莉子は蓮の香りに包まれて祖父の時間へ出かけていく。そしてついに祖父の『想い』にたどり着いた。

タイムスリップものですが、どの時代の人たちも時折あらわれる莉子の存在を淡々と受け入れて日常に齟齬がない。その大らかさは読み手にも伝わって温かい読み心地である。

挿画はどれも優しく、表紙は咲きわたる蓮の花群れ。その上を、朝まだきの夏の空気が覆うように半透明のカバーを掛けた装丁が幻想的で美しい。

(公共図書館勤務 M)

長い間お楽しみいただいた志々目彰さんの連載は、筆者の都合によりしばらく休載いたします。



トピックス「学ぶことは変わることに」

平成二十六年度子どもゆめ基金助成活動

「学校図書館井戸端会議 part 3」レポート

七月十四日(月) 十時から十二時まで、クリエイティブホールにおいて、「学校図書館井戸端会議 part 3」が行われました。参加者は十六名で、図書ボランティア、司書、元・八王子市教諭(学校図書館研究部)、元・八王子市司書教諭などいろんな立場の人々が集まり語り合いました。

一・DVD視聴

会の始まりはDVD視聴でした。昨年来希望の多かった山形県鶴岡市立朝陽第一小学校の『図書館を生かす 学校は変わる』のDVDです。朝陽第一小学校は『学びの宝庫』である図書館の価値を見いだし、教育資源、教育手段としてその価値を最大限生かすべく「学校図書館活用教育」を学校経営の中心に据える」という学校経営方針をもつ学校です。図書ボランティア、司書、司書教諭が連携を図りながら日々教育活動している様子は参加者にめざますき学校図書館の道筋を提示してくれました。

二・話し合い(参加者の声)

・派遣の司書の方が入ることにより見違えるように学校図書館は変わってきました。図書ボランティアは司書の方から、本の分類や季節ごとのレイアウトなどた

くさんのことを教えてもらい、さすが専門職と再認識することが多かったです。更に司書の方が司書教諭や学校の間に入ってくださり、学校と図書ボランティアのコミュニケーションがよくとれるようになり、信頼関係も深まってきました。

・司書の方に1年間だけでも来てもらえて有難かったです。

・今年から司書の方がいらつしやらなくなり、大変不安でしたが、学校を通し「学校図書館担当」に連絡をとれば巡回してもらええることを知り、安心しました。

・先生たちは忙しそうですが、教師の立場からすると応援してもらえると嬉しいという事を聞いて安心しました。学校と仲良く活動していきたいです。

・八王子市の「学校図書館サポート事業」の特徴は「学校図書館担当」というサポート体制があるということです。司書を応援して下支えをするサポートセンターをこれからも存続してほしいです。

三・感想・アンケート

・他の学校の様子を聞けてとても参考になりました。

・朝陽小学校のDVDもとても参考になりました。

・学校、司書教諭、司書、図書ボランティア、学校コーディネーターの立場と意義を感じとることができました。

・もう少したくさん話し合いたかったです。↓会終了後のランチで続きを楽しく和気あいあいに語り合いました。

(大島 真理子)

8月29日『要望書を提出してきました』

今年度も、坂倉教育長（と石森市長）に要望書を提出してきました。今回もご同席くださったのは指導主事の石川先生。本会からは4名が参加しました。

今回の要望書の項目は以下の5項目です。

1. 現行の「学校図書館サポート事業」の進化形として「学校図書館サポートセンター」を、指導課のもとに設立、展開してください。
2. 新たな展開を迎える来年度に向けて、『学校図書館支援マニュアル』（仮）の作成をお願いいたします。
3. 読書推進担当の派遣サポーターの、一人あたりの担当学校数の再検討をお願いいたします。
4. 読書推進担当のサポーターの名称変更をお願いいたします。
5. 小学校図書館へのエアコン、バーコードによる蔵書管理システムの導入など、施設面の充実をお願いいたします。

「学校図書館サポート事業」は、八王子の小中学校の学校図書館をバックアップするために5年前から始まったもの。学校図書館担当による重点校の巡回支援と、読書推進担当サポーターの派遣を両輪とし、学校図書館環境の整備、ボランティアへの指導、先生方へ

の働きかけなどを行ってきました。

巡回支援が5年を以て一区切りとなる今年。教育長のお考えは、両輪あつてのサポート事業という点にブレがなく、この5年でシステムとして整ってきたと評価。「学校図書館サポートセンター」という名称は第2次読書のまち推進計画に謳われていることもあり、1については期待できると考えます。2のマニュアルの作成、4の名称変更、5の施設面については、すでに関係部署が動いているようです。

ただ、3の派遣サポーターの担当学校数については「難しい」とのこと。専門性を尊重し立場を保障する嘱託採用というラインは守りたいとなると、やはり大幅増員は厳しいですね。現在4校兼務している派遣サポーターのみなさんを、教育長は「フロンティア」と呼ばれました。そこに、祈りを感じました。

「それなら、有償ボランティアにして全校配置してはどうか」などという声がどこから聞こえて来そうですが、学校図書館に必要なのは、にこにこしながらカウンターで貸し借りの受付をしたり、図書館のカギをあけしめしてくれる人でないことは、みなさんもうお分かりですよ。

要望書に対する正式な回答は、年度末までに文書にいただくことになっています。

（取材、松下貴子）





お知らせ

本会では年度未まで、主に会員研修としていくつかの活動を予定していますが、一般の皆さんの参加も歓迎いたします、事務局あてお問い合わせください。

今後の予定

11月8日(土) 会員研修と他地区交流会

本会会員、田沼恵美子さんによるブックトークをみせていただきます。近隣他地区の学校図書館についても交流の予定。

平成27年1月〜2月 学校図書館見学会

市内・市外の学校図書館見学会です。



『子どもの本の学校』多摩校プログラムから

問い合わせは日本子どもの本研究会

(電話・0339943961)

11 / 1 (土)

子どもの読書環境と図書館行政の課題

東京学芸大学教授 山口源治郎

11 / 29 (土)

絵描きの周辺ばなし

絵本作家 小泉るみ子

12 / 6 (土)

編集者の仕事 (二冊の本ができるまで)

リーダー編集者 福井和世

1 / 17 (土)

『さよならのかわりにきみに書く物語』を書いて

― 田中正造の谷中村と耕太の双葉町 ―

児童文学作家 一色悦子

1 / 31 (土)

低学年の子どもたちと本を楽しむ

公立小学校教諭 若林真砂子

2 / 7 (土)

19世紀の頃、絵本や印刷はどんなだったでしょう

絵本作家 元大学講師 津田櫓冬

2 / 21 (土)

子どもたちが体験する楽しい調べ学習とおはなし会


― 公共図書館の実践 ―

世田谷区立中央図書館 渡邊尚子

3 / 7 (土)

学校図書館の動向と課題

専修大学教授 野口武悟



編集後記

八王子市の小中学校へ司書の方の派遣が進んでいます。先生方と、ボランティアと、そして学校図書館の専門家がいて、子どもたちの豊かな読書と学びを支えることができます、そのためにこそ、連携が大切なのです。

八王子に学校図書館を育てる会 事務局

lib804sodateruka@gmail.com